

平成26年度

宮城県産業教育審議会

日時 平成26年5月22日(木) 13:30～16:00

会場 宮城県農業高等学校 コンピュータ室

1 開 会

2 開会挨拶

宮城県産業教育審議会会長

宮城県農業高等学校校長

3 授業参観・施設見学

4 審 議

(1) 審議

これからの農業教育の方向性について

(2) 報告

第24回全国産業教育フェア宮城大会について

5 その他

今後の日程について

6 閉 会

進行

委員の皆様、本日はご多用のところ御出席をいただきまして、大変ありがとうございます。開会に先立ちまして本日の資料並びに日程の説明をさせていただきます。まず、お手元の資料の確認をお願いいたします。はじめに開催要項の一枚物。次第と裏面には資料の一覧が記載されております。続いて宮城県産業教育審議会委員名簿、裏面は座席を示しました。次に本日の見学施設、及び順路が記載されましたカラー刷りの一枚物の資料。次に資料1-1から3-3として宮城県産業教育審議会の近年の審議内容と記載しております9ページの綴じ込み資料。次に別冊資料としまして資料4パワーポイントのシートをカラー印刷したものと、資料5平成24年3月に頂きました震災からの復興にむけた今後の専門学科・専門高校のあり方についての答申文。次に番号をつけておりませんが資料6として産業教育フェアのパンフレット。一番下に産業教育審議会意見用紙と記載されておりますFAX様式となります。また、農業高校からPTAカレンダーも配布しております。写真もたくさん盛り込んであり学校の様子がよくわかる内容となっておりますので、後ほどゆっくりご覧ください。なお、資料1-1から3-3までの綴じ込み資料につきましては、産業教育審議会のこれまでの流れや、専門学科専門高校の状況についてまとめたものとなっております。本日の審議会ではこの内容について審議はいたしません、参考資料として配付させていただきました。次に本日の日程についてご説明いたします。配布の要項の次第をご覧ください。この次第の通り進めて参りたいと思います。終了時刻は午後4時を予定しておりますのでよろしくをお願いいたします。なお、本審議会は配付資料の9ページ資料3-3の通り情報公開条例第19条に基づき公開となりますのでよろしくをお願いいたします。それではただいまから平成26年度宮城県産業教育審議会を開会いたします。はじめに大泉会長からご挨拶を頂きます。

大泉会長

大泉でございます。今日は現地の高校の状況を拝見させて頂くということで私どもの方から出向いてやってまいりました。残念ながら今日の審議員の出席が半分ちょっと上回るということで誠に申し訳なく思っております。産業教育審議会の様々な課題がありますが、当面の大きな課題として浮上したのが震災の復興でありまして、先ほども雑談の中でご紹介ございましたように3つの高校の建て直しが必要だということで、急遽私どもの委員会で早急に予算措置等をし、校舎を再建して欲しいという旨を申し上げまして、県議会の方も速やかに校舎を再建するという方向で動いて頂いたこともあり、その運びとなりました。今お伺いしましたら30年というまだまだ非常に長い時

間がかかるようでございます。その間生徒さん達には非常に不便をかけることになるんだろうという風に思いますし、その間先生方のご苦勞も並大抵ではないであろうというように思います。今日はこの仮設の校舎の中でそれでも果敢に授業をおやりになって生徒を育てていらっしゃるということなのでそうした話をお伺いしに参りました。それでこうしたことが場合によっては非常時の知恵というんですか、一般性をもって普遍性をもって他の高校に広められるようなことがあれば、それをして参りたいという風に思いますが、今日は4時までという先生方にとっては短い時間になるのかもしれませんが、聞くところによりますと今日は野球大会とかいろいろな行事が立て込んでいる中でおつきあい頂いているということのようですので、効率良くお話を伺って参りたいと思いますのでひとつご協力のほどお願いいたします。今日は一つよろしくお願いいたします。

進行 続いて本日会場となります宮城県農業高等学校校長佐々木英一が挨拶を申し上げます。

佐々木校長 皆さんこんにちは。今日は宮城県産業教育審議会が本校で開催されるということで会場校として大変うれしく思っております。平成23年3月11日の東日本大震災から4年になります。そして本校も3校分散からこの仮設にきて今このような状態で過ごしてるわけでございます。多くの方々から非常にご厚意を得ましてご支援ご協力をいろんな形でやって頂きました。おそらく今回、皆様方に見てもらおうかと思うのですが、そういう中でも仮設の工業関係のものとかあとは食品関係、そういう風なものも建てて頂きました。なんとか学校としては維持はしているつもりでございしますが、そういう中でもなかなか仮設というところで過ごしている生徒に関しましては非常に私自身もかわいそうだなとそういう風に思ってます。今日は授業そして施設、その他の視察をかねて見て頂こうと思います。学校の概要、あとは学科の今までの取り組みを見ていただきますのでどうか今後の参考にという風なことでお願いしたいと思っております。ご審議のほどよろしく願います。今日はよろしくおねがいします。

進行 続きまして本日ご出席の委員の皆様についてお手元の名簿順にご紹介させていただきます。宮城県専修学校・各種学校連合会会長菅原和宏委員でございます。

菅原 菅原でございます。よろしく願います。

進行 ただいまご挨拶を頂きました。宮城大学特任教授，大泉一貫委員でございます。

大泉会長 大泉でございます。今年から定年退職しまして，職名が特任教授と変わりましたのでよろしくお願いいたします。

進行 宮城教育大学教授本図愛実委員でございます。

本図委員 本図でございます。よろしくお願いいたします。

進行 宮城学院女子大学教授，平本福子委員でございます。

平本委員 よろしく申し上げます。

進行 東北福祉大学教授，塩村公子委員でございます。

塩村委員 よろしく申し上げます。

進行 宮城県商工観光部次長，西村晃一委員でございます。

西村委員 西村です。よろしくお願いいたします。

進行 石巻市立女子商業高等学校長，伊東玲子委員でございます。

伊東委員 よろしく申し上げます。

進行 なお，宮城県商工会議所連合会常任幹事間庭洋委員，宮城県中小企業団体中央会専務理事高橋幸夫委員，アイリスオーヤマ株式会社社長室長阿部一義委員，宮城県農業協同組合中央会常務理事佐藤純一委員，宮城県漁業協同組合専務理事船渡隆平委員はご欠席となっております。続きまして，本日の報告等頂く宮城農業高校の職員をご紹介します。佐々木英一校長でございます。

佐々木校長 よろしく申し上げます。

進行 高野知行教頭でございます。

高野教頭 高野です。よろしくお願いします。

進行 川口友和教諭でございます。(授業中で不在です)

進行 続いて宮城県教育委員会の主な職員を紹介いたします。高校教育課長山内明樹でございます。

山内課長 はい、よろしくお願いいたします。

進行 高校教育課副参事兼課長補佐佐藤健二でございます。

佐藤副参事 よろしくお申し上げます。

進行 以上でございます。それでは始めに授業参観、並びに施設見学を行います。配付資料に見学施設及び順路がございますのでご確認ください。ここからのご案内を農業高校の高野教頭をお願いします。

高野教頭 それでは私の方で本校の授業や、施設の視察についてご案内いたします。今日は学校内、その後校外にもできます。ただ、あいにくの昨日からの雨で足場が悪くなっております。なるべくいいところと思いますが、農業は土でやってる関係でちょっと足元が悪いところも通るかと思えます。靴の方がちょっと汚れる時にはそこまで行かないで頂いても結構だと思います。バスでこの後ご案内いたしたいと思えます。先ほどの図を見て頂きますとこれからこのまま出まして実習棟、一階の食品加工室の方を見学していきます。その後バスで移動して、ちょっと雨の関係で場合によって変更になってるかもわかりませんが、造園の場所、畜産関係施設、園芸施設、そして露地、水田関係、最後にこちらに戻りまして実習棟、この建物の表側に機械工作室がありますのでそちらをご覧頂いてこの部屋にお戻り頂いてお休み頂きます。お休み頂いている最中、今日食品化学科の方でアイスクリームをつくりましたので、ちょっと今日寒いですがお口汚しにお召し上がり頂ければと思っております。それでは時間も限られておりますのでさっそくですが会場の方にご案内させていただきます。よろしくお願いします。荷物の方は貴重品だけは持って出て頂いて、後は鞆等置いて頂いて結構だと思います。

施設見学場所

- ①農産加工室 (食品加工に活用, ジャム, アイスクリーム, パン等)
- ②造園 (ヒバの剪定作業実習の様子を見学)
- ③グラウンド (教職員で作った簡易グラウンドの見学)
- ③仮設牛舎 (牛, 鶏, 豚の飼育状況について見学)
- ④野菜ハウス果樹園 (草花, トマト, イチゴ, メロン, 桃, 梨, リンゴ畑を見学)
- ⑤露地野菜畑 (ねぎ, 大豆等の栽培研究)
- ⑥校舎機械工作室 (溶接機, 旋盤, エンジン分解・組み立て)

校舎並びに農業実習の様子について授業観察と施設設備について高校から説明を受けた。

大泉会長

4時までということになってますのでさっそく審議を始めたいと思います。食べながら結構だということですのでゆっくりお食ください。最初に1のこれからの農業教育の方向性についてですが、平成24年3月の答申以降農業教育状況について、先生方から改めて話を伺った上で各委員からのご質問ご意見、それから今農場を巡ってきて様々なご質問があるかという風に思いますので、そのご質問を頂ければと思います。それでは、農業高校の先生お願いします。高野先生よろしくお願いします。

高野教頭

それでは、本校の概要につきまして私の方からご説明し、各学科につきましては科長からご報告をさせて頂きたいという風に思います。
本校は今年で創立129年を迎えます。海岸から約1キロのところにありました前の学校は、東日本大震災の津波によりまして壊滅的な被害を受け現地での復旧再建は困難となっております。当時学校にいた生徒、及び教職員は全員避難し無事でしたが、自宅にいた生徒2名と3月1日に卒業した生徒の1名が犠牲となってしまいました。被災した状況下でも授業再開に対応できるよう、流された実習着を洗濯するなど職員はできることからはじめておりました。震災後2ヶ月後の5月からは学科の教育内容に合わせて柴田農林高校、亘理高校、加美農業高校の3校に分散しての授業が再開されました。各校からは細やかな配慮を頂きました。特に亘理高校には避難所を抱えながらの本校の受け入れということで感謝しております。加美農高へは移動に90分を要し、行きと帰りは車内で授業を行っておりました。この時期は授業ができる喜びはあるものの職員生徒とともに負担が大きかったのではないかな

という風に思います。震災後6ヶ月経過した平成23年9月からこの場所で農業園芸研究所、宮城県農業大学校の協力を得ながら仮設校舎での授業を再開することができるようになりました。しかし、食品化学科は実習施設がないため昨年の9月まで2年間にわたり、各学年週1日ずつ亙理高校での授業を余儀なくされておりました。国内国外を問わず多くの方々から頂いた激励や支援は学校を勇気づけ復旧・復興への希望につながっておりました。グラウンドや水田までは距離が遠く支援されたバスはフル稼働の状態にあり、農業機械の早期の支援は農業教育を展開する上で大変助かりました。また、農場やグラウンドなどの造成は職員自ら行い現在の教育環境を作り出してきました。昨年度には仮設の牛舎、武道館、実習棟、農場管理棟が完成し学校施設はすべて整いました。学校が一つになって以降、仮設施設ではあっても魅力ある農業の再開に向けて、生産から加工、流通、消費に至る6次産業化への取り組み、マーケティングの手法やITを活用した創造的な農業経営を実践する人材の育成、環境に配慮した安全・安心な環境保全米の栽培や有機栽培等の取り組み、地域の農家での現場実習を通じた就農意識の醸成、大学・研究機関や農業関係団体などと連携した取り組みなど、各学科専攻班単位で実践して参りました。詳しくは後ほど各学科長からの説明で紹介いたします。次にこれまでの生徒達の活躍の一部をご紹介します。作物部門では環境に優しい米作りを目指し、全国高等学校お米甲子園の食味コンクールで特別優秀賞を受賞いたしました。畜産部門では津波を生き抜いた乳牛の子供を大切に飼育し家畜共進会において2年連続グランドチャンピオンに輝きました。食品化学科ではローソンと提携した宮農パンの製作や全国高校生観光甲子園の出場など地域復興に向けた様々な取り組みを行っております。特にご当地絶品うまいもの甲子園では農林水産大臣賞を受賞し全国一に輝きました。農業クラブでは意見発表大会において震災を体験し地域復興のためのボランティア活動から学んだ思いとこれからの自分の生き方についての意見発表が全国大会に出場いたしました。またプロジェクト発表県大会では2年連続2部門で最優秀となり東北大会へ駒を進めております。部活動ではウエイトリフティング、相撲、ボクシングが全国大会に出場し、ソフトテニスも東北大会に出場しています。また、私の仕事作文コンクールなどの多くのコンクールにも参加し、全国選考で優秀な成績を残しております。宮農復興太鼓は地域のイベントなどからの出演依頼も多くなってきており地域の復興に向け少しでも貢献できるよう毎日活動しております。仮設魂という言葉も自然と聞かれるようになり、生徒達が毎日そろって活動することができるようになってからはよりいっそうまとまりができてきました。おかげさまで生徒の進

路も100%を達成しており、このような環境でも頑張っている生徒達の努力と地域への貢献の思いが多くの方々を受け入れられているものと思います。このような環境の中、今年度入試では多くの中学生の志願がありました。校外で生徒達の活躍がマスコミ等で取り上げられ本校の農業教育が理解され農業への魅力と期待が大きくなったものと考えております。本校は現在地の東側に平成30年4月に新生宮農として生まれ変わりますが、震災から数えて7年を要します。再建には様々な制約があり、新校舎建築に合わせ時代の要請に見合った学習環境を整え、志を持った担い手の育成や魅力ある農業の再開に向けた創造的復興を目指していかなければいけないと考えております。今後4年間は仮設での教育が続きますが、より学校生活を充実させ子供達の志を実現させていけるよう職員のモチベーションを高めながら仮設魂で教育活動に邁進したいと考えております。このような課題の取り組みの一つとして、今年度文部科学省の指定事業であるスーパープロフェッショナルハイスクール、SPH事業の指定を受けることになりました。この事業は将来を担う次世代の育成を目指すため大学、研究機関、企業等との連携の強化等により社会の変化や産業の動向等に対応した高度な知識・技術を身につけ社会の第一線で活躍できる専門的な職業人の育成を行うものです。指定期間は3年間で研究テーマは「日本最古の農業高校 震災、津波からの復活の取り組み」といたしました。農業大学校や地域の産業界と連携しながら地域の食材を使った商品開発とブランド化や、ICTを活用したスマート農業への取り組み、自然エネルギーを活用した次世代型農業への取り組みなど学科の特徴を活かした魅力ある農業モデルを、学習プログラムとして構築し復興の支えとなる実践力を備えた就農者の育成を目指して参ります。続いて農業園芸科、生活科、食品化学科、農業機械科の順に学科長からご説明をいたします。

赤井澤教諭 農業科科長の赤井澤と申します。よろしくお願ひします。農業園芸科の目標はご覧の通り3つ掲げております。農業学習の充実を図る、資格取得の指導強化を図る、学校農業クラブ各種大会の上位入賞を目指すという3つを掲げて日々学習に取り組ませております。1年次の農業と環境では主に前期が枝豆、大豆の栽培、後期は大根の栽培です。この2つの作物を通して農業に関する知識、栽培、調査といったものを行いながら基礎的な学習を学ばせています。2年次からは9つの専攻班に分かれまして、プロジェクト学習を実施しております。専攻班の活動内容については後ほど詳しくお話させていただきます。また関連教科としまして農業機械、農業情報処理の二科目では危険物取扱者の資格、ワープロ検定の3級の取得を目指して日々指導しており

ます。3年次ではプロジェクト学習の継続とその成果の発表に重点を置き、指導しております。農業科の専攻班には、2つの専攻班があります。まず1つ目は作物の方ですけども作物班は省力化稲作栽培と米の加工をテーマに株式会社クボタとの連携で鉄コーティング種子による直播栽培に取り組んでおり被災農家の支援と地域農業の活性化を後押しできるような活動しております。酒米「蔵の華」を栽培し、収穫までを行って、地元の酒造会社の協力のもと日本酒「復興太鼓」の製造や販売、環境保全米の生産・販売等を学習しております。畜産班の方では津波から生き残った奇跡の牛、先ほど教頭先生の方からも紹介ありましたけども、その奇跡の牛から生まれた子牛をコンテストで入賞させることを目標に活動しております。宮城県ホルスタイン共進会未經産牛の部の方ではグランドチャンピオン、そして農業クラブ家畜審査競技大会の方では乳牛の部の方で団体優勝・個人優勝、あとは肉用牛の部の方で団体優勝、そういう成果を残しております。続きまして園芸科の方ですけども、園芸科の方は7つの専攻班があります。まず植物バイオテクノロジーの班ですけども、こちらは地域の遺伝資源保護と被災地域の緑化技術の開発をテーマに外部団体と連携して津波で被害を受けた広浦校舎の桜の培養、復活と地域への配布活動を行っているというところです。次に露地野菜班ではカルビーとの連携を通してバレイショの生産から加工、流通、消費に至る6次産業について学習しており、本校で栽培収穫したバレイショを原料にした新商品の開発にも取り組んでおります。施設野菜1の方では、主にトマト、キュウリ栽培それに重点を置きまして漬け物の製造や販売について学習しております。地元の企業の協力のもと、キュウリの加工漬け物の販売を目指して力をいれているということです。またカゴメとの連携事業を通して加工用トマトの栽培・加工・販売まで一連の工程を学習しております。続きまして施設野菜2の方ですが、主にメロン、イチゴの栽培の他、農業生産法人を見学しイチゴの生産から加工販売について学習するとともに経営についても学んでいます。また、地元の幼稚園との交流を通じた食育活動も行っております。続きまして草花班ですけども、花の活用に関する研究を行っております。外部講師によるフラワーアレンジメントの講習会や以前から行っていた県庁や仙台空港の植栽活動を通じた地域貢献活動も継続して行っています。また、造園班では名取市や岩沼市が主催する海岸林再生プロジェクト等に参加し復興に向けて地域の方々と植樹活動を行っております。果樹班でございますが、農業大学の果樹園をお借りして、りんご、なし、ももの栽培を学習し地域での販売実習を通じて交流にも取り組んでおります。平成25年度の連携授業は、畜産班での連携授業、農業科や園芸科の3年生のクラス

が東北コットンプロジェクトに参加し綿花の栽培を通して被災農家を支援する活動を行ってきました。昨年度の卒業生の進路につきましては、進学では農業関連の大学や専門学校など多方面に進学しております。就職では、地元の食品製造や販売などに就職しており1名が農業の担い手として就農しております。震災以降国内外から多大な支援や励ましにより少しずつ教育環境が整いつつあります。生徒個々の学びにも意欲を感じられるようになり、日々学習に広がりやこだわりが感じられるようになりました。しかし多様な学びの場となる圃場の面積や施設の不足の部分もあり学習環境がじゅうぶんとは言えません。震災復興や将来の地域産業の担い手となる人材育成を行うために学習環境のさらなる充実に向け、また努力していきたいという風に考えております。続いて生活科の方に移りたいと思います。

渡部教諭

生活科を担当しております渡部です。よろしくお願ひいたします。生活科では大きく2つの類型がございます。福祉類型と経営類型でございます。全国農業経営者育成高等学校としての指定学科にもなっており学校では最初のスライドにありましたように仙台の伝統野菜の栽培を中心に1年生から3年生まで農業学習を展開しております。仙台なす、仙台白菜、大豆等の野菜を栽培しながら、それを活かした専門的な学習を展開しております。福祉類型の方では介護職員初任者研修の基礎基本の学習、それから保育検定の学習、経営類型の方では食物調理技術検定1級全員合格を目指して学習を繰り返しております。こちらが検定の様子です。合格する作品につきましては左下のところにある規定の時間内でできた分までということで外部の検定委員の方に見て頂き全員合格を目指しております。経営類型の方では2年生ではフードデザイン、3年生ではグリーンライフなどといった農業科目と家庭科科目が結びついて専門的な学習を展開しているところでございます。本校生活科では昨年度から親になるための研究指定校として指定を受けております。3年間を通しまして将来親になるための資質・能力を養っていく指定校ということで手を挙げております。また全国知財教育の研究指定学科ということで生徒達の物作りのアイデアを育む研究指定校にも内定しております。今年は全国産業教育フェアが宮城県で開催されますのでそれに参加に向けても日々学習を深めているところでございます。学校としましては、学校内での授業プラス産業界や大学との連携事業にも積極的に取り組んでおります。本日お見えになっております平本先生にも多大な指導を頂きまして生徒達は大変充実した学習をさせていただいております。この場をお借りして感謝申し上げます。伝統野菜を使ったお弁当、野菜を使ったスイーツとかシュークリーム作

りなどを実施しております。また宮城大学との連携やそれを活かした学習展開もしております。特に被災地域の再生活動ということで、塩害に強い仙台白菜を被災した農地に植えて、韓国と連携しながら津波の被災地を再生させる活動にも取り組んでおります。JA全農みやぎ、宮城生協、味の素との協力で活動しております。これらの生徒達の活動がおかげさまで外部のコンテストで認めて頂き、みんなの笑顔プロジェクトでは東日本のベスト6チームにも選ばれております。また、毎日農業記録賞高校生部門では全国の50作品にも選ばれ、外部の大学、産業界のみなさまのおかげで生徒達の学習がかなり充実しているということでございます。卒業後の進路でございますが、この春卒業した3年生は、大学、専門学校、県内外の民間企業にすすみ、宮城教育大学の特別支援教育に関する学科にも合格することができるなど学科で学んでいる専門分野を活かした就職、進学を実現させることができいております。これからも多くの方のご支援を頂きながら、学校の活性化に向けて努力していきたいと思っております。以上でございます。

橋浦教諭

食品化学科を担当している橋浦と申します。食品化学科について説明させていただきます。学科の目標と学習内容、あと進路状況について今回は発表させていただきます。本学科の目標ですが、食品製造から流通まで食を化学する心を身につけた人材を育成するということで設定をしています。それを実現するために1年生では慣れるということ、2年生は考える、3年生で身につけるというような段階を踏んで指導していこうということで取り組んでおります。それを生徒に話す際に生徒に期待することとして話していることですが、まず始めに基本的生活習慣として時間厳守、あいさつ、整理整頓をしっかりしようということ、その土台を作った上で学習成績、部活動、農業クラブ、各種コンテスト、資格取得を頑張って成績を残す。最後に希望進路の達成に挑戦する姿勢というのを磨いていこうという話をしているところです。また、昨年度から繋ぐという学科のスローガンを掲げて食品化学科の製品のラベルに添付して販売をするようにしております。学習内容ですが1年次では基礎となる農業と環境、材料となる農産物の栽培を枝豆と大根で学んでおります。大根については冬場、たくあんに加工して校内で販売をしたりということを行っております。総合実習の授業では製造実習でイチゴジャムやうどん等を製造したり、実験分野では砂糖や小麦粉等を利用した食品を使った実験のほか基礎的な化学実験を行っております。2年生では幅広く食品に関する科目を学ぶということで、食品化学、微生物利用、流通の授業をしております。総合実習ではマーマレードやそばを1年次の実習をベースにちょっとレベル

の高い商品を作っていこうということで取り組ませております。あと実験と危険物の資格取得にはクラス全体で2年生で取り組むようにしております。3年生では食品化学と微生物を主に学ぶ製造類型と流通と農業経済を学ぶ流通類型ということで2つに分かれて授業を展開しております。総合実習と課題研究につきましては、2年生までは3班のローテーションで同じ内容をやっていますが、3年生では農産物加工、畜産物加工、食品分析ということで3班で1年間自分の専攻した班を学ぶということで取り組んでおります。ここ3年間の進路実績についてちょっと細かいんですが提示をしました。数えてみると、約半数から半数をちょっと超えるくらいの生徒が食品あるいは流通関連の業界あるいは進学を達成しているというところが見えております。栄養士あるいは調理師をめざしたいという思いを持ちながら公立学校で食品を学べるというところで本校の食品化学科を希望している生徒も在籍をしています。あくまでもわれわれとしては食品加工と調理は別だと認識のもとに行っておりますが、それでも食品の基本ということで実習に取り組ませております。震災以降昨年度8月までは、2年半くらいでしょうか、亙理高校にお世話になりました。9月に先ほど見て頂いた実習棟が完成をしました。これまで各種の制度を活用していろんな見学が達成できたり各種団体からの支援によって機器が充実してきております。今後とも学習活動についてご指導とご助言を頂ければという風に思っております。では次に機械科の方に移りたいと思います。

石橋教諭

それでは農業機械科です。石橋と申します。よろしくおねがいたします。農業機械科は40人のクラスが3学年となっております。農業機械科は震災以降、車庫の方を利用し実習を行ってきました。昨年8月に仮設実習棟が完成し、たくさんの工作機械を支援して頂き、今は充実した実習が行えております。農業機械科では工業高校に負けない人材作りをテーマに指導しております。特に実習では旋盤、フライス盤をメインとする機械工作実習、様々な溶接技術を学ぶ溶接実習、エンジンや農業機械を学ぶ内燃機関実習の3部門に加え、この7月からはこの部屋で3DCADを用いたコンピューター実習を始めることができます。この実習を用いることによって農業機械科からさらに多くの新しい進路を目指していきたいと考えております。学科独自の学習として課題研究の中で植物工場を行っております。震災前には生徒達が一から製作した植物工場が文化放送主催の環境コンクールで全国大会優秀賞を頂きました。震災後はたくさんの方々からの支援、そしてサイエンスパートナーシッププログラムに応募し植物工場の研究を再開しました。その中で

千葉大学の園芸学研究科丸尾教授のご指導の下研究を行い始め、今年度千葉大学様とベンチャー企業の株式会社ミライ様と本校の農業機械科で植物工場の研究運営を行う事業をスタートさせます。次に本校の農業機械科でとれる資格になります。この資格を取ることを推奨しております、ほとんどの生徒が多く資格取得にチャレンジし成果をあげております。進路に関しましては例年40人中の半分は進学をしております。主な進学先としましては宮城大学をはじめとする県内の大学、自動車関連の専門学校となっております。就職先は株式会社クボタ様をはじめとする農業機械系の企業、そして地元の工業系の企業となっております。以上で農業機械科を終了したいと思います。

大泉会長

ありがとうございました。一通り宮城農業高校の概要を説明頂きました。これを受けてディスカッションということになるんですけど、ご質問を頂いて委員の皆様の方が関心を持たれたこと、それから農業高校の方向としてこうしたらいいのかというご提言等々がおありになれば、まず質疑から伺います。どなたでも結構ですけど、まああれですね、正直農業高校って僕は宮城農業高校って昔からよく知ってたつもりでいるんですけど、今日来ていろいろ話を聞いてるとまったく知らなかったなって気になりました。というのはいろんなことをやっていて、農工商連携じゃないけど、商がないだけで生活もあれば食品もあれば、総合産業高校というそんな感じがしました。だからそういう意味では非常に驚いた面があるんですけど、どうですかね率直な感想からでも結構です。僕は横で目に入らないので、すぐ手を挙げなくても結構ですから、ぱっと発言なさって頂いて結構でございます。もう一つ言えば、総合的にやられてるなという印象とこれは被災したからなんでしょうか、この審議会でもずいぶん言っていた地元企業との連携だとか地元産業界との連携なんてことを盛んに言っていたんですけど、むしろ向こうの方から手を差し伸べて頂いて、カルビーだとかクボタだとか亀田とか森永だとかいろんな企業さんがお入りになってますよね。それで期せずして連携教育みたいなのができてるっていうのも非常に興味したことなんですけどね。それに乗じてというのかな、それを契機にと言ったらいいんですかね。いろいろ生徒さん達生き生きとしている感じがするし、いろんな賞をおとりになってるし、そういう意味では被災したとはいえ理想的になってきてるなとイメージはうけましたけどね。いろいろ課題が多くて先生方ご苦労されてるんでしょうけど。

平本委員

私もこのところマスコミとかいろんなところに宮農の露出が結構多かったの
で、だから生徒さんがたくさん受験してくださって良かったなと思います。

被災したことで取り上げられていろんな企業連携とかになってるのかなという気がしますけど、それはそれこそうまくこれからのやり方の中に取り込んでいって定着させてくというのがいいのかなと思いました。1点私が思ったのは農業を6次産業的に経営的にも成り立つところまで子供達をきちっと教育したいんだということを結構見学している間にもひしひしと感じたんですけれども、そうなったときにカリキュラムにもうちょっといわゆる作るコンテンツみたいなところはまさに花を作るとかトマト作るとかってあるけれども、それもしっかりやんなきゃいけないけど、それをビジネス的センスで見ていくとかなんかそういうものも授業に入ってこないといけないのかなと。そういう時にいわゆる外部の人達、企業とか、そういう人達もうまく活用すればいわゆる高校の教員だけでというのは難しいのかなと思うし、やれたらむしろいいんじゃないのかなとすごく思いました。それと資料2を見ると商業科が極端に減ってるから、こういうようなセンスは農業の方へ資源は投入したらいいんじゃないのかと、私は何とはなしに思ったんですけれども、一つはやはり宮城県が持つてる資源はこっちに投入したらどうだと思ったんですけれど、ビジネスのようなところをきちっと事業としてやってくカリキュラムの中に入れてくってのはこれからは必要なのかもしれませんね。それで具体的に今度販売するお店ができればそこで実践的に学びながらそういうことで経営的にも成り立つ様な若い人が出て来ると楽しみですよ。以上です。

大泉会長 伊東先生どうですか。商業のこと。

伊東委員 商業の専門高校なんですけれども、私20代の頃宮農に勤めていたものから、私が勤めていたときに100周年をやったなあとなんていうようなことを思いながら、アイスクリームを頂きました。私がいた頃はアイスクリームはやっていなくて、でも牛乳はすごくおいしかったなあなんて。毎週牛乳を作ってる時に牛乳瓶を家族の分を全部配達をしてもらって、うちに持って帰って、今思い出したんですけれど真夏に袋に入れて車に乗せて持って帰ったときに、急ブレーキかなんか踏んだときにぼろぼろっとなってますね、全部拾ったと思ったんですが1本車のシートの下にあったんですね。2、3日したら発酵して紙のキャップがボンと飛んでますね、しばらく車の中臭かったなというのを今思い出しておりました。さっき案内をして頂いたときに広浦の砂を持ってきたんだっていうのを聞いたら涙が出そうになって頑張ってるんだなあなんていう風に思っていました。商業高校の方はですね、なんて言う

んでしょうね。農業高校とか工業高校はものを作るっていうのがあって、目に見えるんですけども、商業高校というのはものを作るというところがないので、なかなか厳しいところがあるんですが、商業高校は商業高校で地元企業さんとコラボでラベルを作ったりそれから商品開発をしたりなんていうことはしてるんですけども、農業高校さんは実際にものができるあがっているのが見えるのでいいなあという風に思っていました。

大泉会長 そうだね。農業高校で使ってる農業経営の教科書はどれ使ってるか知らないですけど、あの教科書の中身は農業はどうだとか世界の農業はどうだとかあんまりビジネスの役にたたないんだよね。ほんとのこというとね、だから2単位か1単位になってるけどやっぱりビジネスは経営というよりも実際に販売したりなんかしながら実感としてやる必要があるんでしょけど、僕もね平本先生と同じように思ったのは、たしかに一生懸命楽しそうにグループごとに勉強されてるのはいいことだと思うんだけど、成長点だとかやはり間引きだとかどっちが肥料が良くて伸びるかとか糖度が高くなるかとかいいんだけどね、大事なことだとは思ってるんだけど、例えば十アール何トン作ってこの面積からどのくらいの収益があがるんだとか、あるいはこの中で作物の収益性を高くするためにどういう作物選択をしたらいいんだとかね、そういう頭を訓練をさせるような科目があってもいいのかなという気はしたんですけどね。これはでも今の高校のカリキュラムの中にはたぶんないんだよね。残念ながら。だからしょうがないって言えばしょうがないんですけど、さっき言ったように経営学でやるのかと言ったら経営学でやらないからね。

平本委員 ほんとはそういう実践的なものがあるといいですね。

大泉会長 そうですね。販売もかねてね。

平本委員 そう、販売もかねて。私もその事はちょっと思っててうちの大学でも栄養はものではないけどコンテンツなんですよ。ただそれを商品開発なんかするときに例えばパッケージどうするんだ、どういうデザインにするんだみたいなところはちょっとそういうスキルはなかなかうちにはないです。今東北工大の学生と一緒にコラボしてるんだけどもう全然違うスキルなので、うちは商品という中身はいろいろやるんだけど、なんか方向性もうちょっとデザインとかね。そういうものを入れたりとか、それかもういっそこままでいなくて外とコラボするとか、なんかやっぱり私

は具体的に売れる売れないとかねそういうところのレベルの実習をすると、どうしてもそういうただやってみたというレベルを超えてやっていかなきゃいけないので、学びも深くなるかなという風に思ったりもするんですけど、高校生がやったからいいってレベルでは売れないですよやっぱり。だからその辺までいくときに、違う領域を授業の中に取り込んでいくのか、外と連携するのかみたいなところはあってもいいのかなと思ったりしました。

山内課長 宮農さんの方から何かないですか。

川口教諭 さきほど大泉先生の方から経営のところ、実は今日行かなかった圃場にネギを定植したんですけれども、それに一粒何円かかって、ちなみに1列50メートルあるけれども、この一列で順調に育てばいくらぐらいになるかって話をやっぱりするんですね。ネギの定植をするにしてもこれも1本定植するのにいくらかかって、それが文化祭の時期に販売するときにくらぐらいたと予想を立てさせて、生徒は種の値段は言うんですけれども、ここ50メートルだと5000円くらいかな、2000円くらいかなと。根拠は何でと言うと株間はいくつでそれを計算するところまで出てこないんですね。何となくいくらというのがでてくるので、これをちなみに全部やると一列一万円くらいがだいたい相場になるんだよという話をしたりしてます。やっぱり経営バランス、経営的な感覚をもたないと将来いい経営者にはなれないでしょうし、そういう着眼点を持って欲しいということで先生のご指摘がある通りですね、やっぱりやんなきゃいけないなと思って実践はしております。今日の枝豆も最終的に一袋200グラムで売るんですけども、多く売れた方が収入に結びつくけども、摘芯、成長点つまむ手間を考えるか、何もしないでとれたものだけで売ることかと言うところも最後に自分が仮説を立ててやってみてどうだったか。その時に経営、天候とかがあった時にはこういう風にリスクもあるんだよということになるだけ教えるようにはしております。

大泉会長 枝豆でマルチやってるのはびっくりしたんだけどね。高級枝豆作るの。

川口教諭 いやいや、風も強かったり雑草も生えたりするのでそういうことでやっております。

山内課長 最初に会長さんが震災の影響もあってずいぶん地域の方がいろいろ入ってき

てくれるんですかねとお話なさってたんですけど、間違いなく震災の影響というのはあったと思いますね。ただ震災の前からもですね、特に商業とか工業あたりを中心に、まあよく言う地域の子は地域で育てるということで、地域の産業界の方が学校に来て直接の実践の指導をしたり、インターンシップの機会を作ってくれたりということがずいぶん進んではいたんですね。それがやっぱり震災以降、はじめは社会貢献活動とか被災の支援ということからスタートしたと思うんですが一気に環境が整ったという感じはあります。ですから今日施設を見て頂いてこの辺がまだ足りないとかっていろんなお話が出たんですが、これからの教育は、特に産業教育や専門教育は学校の中の施設で、学校の中の人や物やお金で全部完結しようとは思わずに、最初からまず地域の教育資源という風な捉え方をしうまくそれを引き入れながら教育を進めていくっていう発想でいくのが必要だと思いますね。ですから、クボタさんはじめそういった事業所さん側の力というのははじめからもう資源としてとらえて、一緒に教育を進めていく、そういう発想というか観点がすごく大事なんだろうなという感じはしてますね。それから、今回震災直後で、たまたまこれからしばらくの間そういう支援を受けられるというわけではなくて、今後ずっとそういう関係作りをしていく必要がやっぱりあるんだろうなという風には思っています。

大泉会長 これはその受け皿何かは班が受け皿になるんですかね。作物班だとか畜産班だとかバイオテクノロジー班だとか班がありますけど。そういうわけでもないのかな。いろいろこういうことやりたいってきたら受け皿はどうなんですかね。

山内課長 総合案内というのがあるんですか。こちらから持ちかけるというのもありますよね。こういうのやってもらえないかっていうね。

高野教頭 基本的に部門テーマ、専門のところでやり合うということになるので、カルビーさんには食品化学と露地野菜と両方入って、食品化学はトマトの生産なのでカゴメさんとやっています。

大泉会長 カルビーさんがどうして国産のポテトを使って成功したかなんて話を聞くのはすごく役に立つけどね。10アールからポテトどれくらいの値段でどのくらいのトンでとればいいのかとかね。そういう話は楽しいし、カゴメさんもそうだしね。カゴメさんはあれでしょ？その今いいトマトジュースを機能性を

少しいろいろ言い出してるから、食品加工と一緒にやるのはいいのかもしれないしね。あともう一つ僕驚いたのは、やっぱり農業高校ひとつを運営するというのは膨大な投資額がありますね、見てると。こんなに高校ひとつ作るのに投資してるっていうのはある意味幸せだなって思ったんですけどね。もしかしたらうちの県立大学だったけど、県立大学よりも投資額大きいかもしれないね。いやちょっとざっと見た感じで言うんで申し訳ないんだけど。たぶん、このフローというか運営費は相当いってるような気がしますけど。

山内課長 一般に専門学科専門高校はそうですね。工業もそうですし、例えば水産高校なんかも船一つで、例えば学校一つ分とまではいかななくてもそれぐらいの建造費がかかるわけで。

大泉会長 県の資源として掘り出さない手はないなって気にはなりましたがね。

山内課長 あと今日はどちらかといえば説明が科長さん中心だったということもあって、各科ごとにこういう取り組みをしてますっていう、その内容は各科の専門性を深める内容ということが中心だったんですが各科を超えてつながるような取り組みといった部分はどうなんですかね。例えば6次産業化って話がいくつかでたんですが、それもその各科ごとにそういったことを一つ模索してるっていうことであって、さっきコラボなんて話も出ましたが、科を超えてぱっとそれがすぐ成立するような土壌っていうのもあるんだと思うんですね。それぞれの専門を持ち寄って、牛乳を作る人と、パッケージ考える人と最後販売する人が科ごとにそろっているわけなんでね。そういった科を超えた取り組みみたいなのはどんなのがありますか。

赤井澤教諭 農業科の方からですけども、畜産班のほうで鶏を解体する実習があるわけですけども、鶏の解体実習した鶏の肉に関しては食品化学科の方にもって行ってソーセージに加工してもらおうとかそういったものは今できる範囲での施設の中でやっております。

大泉会長 なるほど。あの私ねイチゴでジャムを作るんですが。果樹は。

高野教頭 ただ今面積がないので学校の生産物だけでは加工品に全部回らないっていうのがあって、購入しなきゃいけない状況です。先ほどのアイスの件もですけども、学校の乳牛の牛からだとか殺菌設備が今足りないんで、まあそこまでで

す。新しい学校で一つの牛乳製造のプラントも前もあったんでいれてもらうような計画もありますので、そうなってくると規模も大きくなってある程度の生産量もあがる、そういう設備も充実してくれば、いわゆる本当の宮農ブランドっていいですかそういったものはできるようになるかとは思いますが。ただそれでもやはり農業科の場合、例えば全部食品化学科に頼るわけじゃなくて、農業科の中で独自に自分たちで作るという力もやはり必要になってくることはでてくるかとは思いますが。どういう科とタイアップできる、例えば微生物関係であればチーズにするとか、そういったものは当然一緒になってやりますし、自分たちでできるものについてはアイデアで何か作るっていうのも考え方としては出てくるのかと。学科の独自性とその横の連携を持ったものとかっていうのは考えていた通り将来施設設備ができれば、新しい学校ではそういう取り組みもできると思っております。

山内課長 分業化が図られてそれぞれ専門性を持って1+2+3という考え方も大切なんですけども1のひとにも2の人にも3の人にも一通りの全部の経験をさせておくということもすごく大事な感じがしますね。だから、2とか3の人とかにも、一度土作りのところを一度経験してもらおうとか、1の人にも最後の販売のところまでを見極めてもらおうとか、そういう一通りの経験を全部させられるっていうのもこの農業高校の良さな感じはするんですけどもね。

大泉会長 そうですね。どうですか。

本図委員 今のことに関連しまして今専門的な学びでのご指摘でしたけども、子供達生徒達の頑張りようを横で科を超えて、先生方一生懸命垂れ幕とか作ってエンカレッジされてるんですけども、生徒さん達の中でそれが科を超えて共有できるような自治会とか生徒会とかそういう仕組みは当然あるんですよ。今回お聞きしませんでしたけど。

高野教頭 当然生徒会は学校にありますし、農業に関しては農業クラブという団体があります。全員がクラブに行っておいてプロジェクト発表やったりいろいろな校内外活動もありますし、ボランティア活動もあったりとか、特徴的なのが農業クラブです。家庭クラブはありますけども、工業高校や商業高校で同様のクラブが商業あるのかどうかかわかんないですけど全国規模の活動ができるのは農業クラブというのがございます。

- 本図委員 ぜひ科を超えて生徒達の中で自己肯定感というかそういうことが共有できるようにさらにご指導頂けたらなと思います。それからもう一点。大泉先生から大変なコストがかかっているので投資がというのがありまして、私もちょっと正直驚きまして、うちの大学よりもお金がかかっているんじゃないかという風に思ったところですが。ぜひこれをちょっといろいろ生徒指導上の問題で中学校は大変かもしれませんが、小学校などではもう今どんどん小学校でいろんな物作りだとかキャリア教育ということで、職を知るっていう、職業の職ですね。ということが課題になってきているので名取市の小学校などにも生徒さん達が指導者として専門的な知識を持って、たぶん小学校の先生よりもプロの点については大変な知識を生徒さん達持っていくようになってるのではないかなと思うんですね。そういうところで、ぜひ教える側として子供達の前に立って生徒さん達が自信を持ってもらったりコミュニケーション能力をもってもらったりというようなことで、そのことがひいては自分たちってすごく大事にされてるんだなっていうことに、ここの高校で大事にされてるんだなっていうことに気づいて頂けるような、そういった今までの今日お伺いした連携っていうのは、企業との連携でどちらかというとな静的な連携なので、もっと人との連携で例えばカルビーさんの方、いろんな企業のクボタさんからでも、その人がどういう思いでここで連携しようって言うてくれたとか、そういったその人との動的な連携といいますか、静動でわけのいいかどうかあれですけど、人との連携っていうことの小学生っていう子供との連携というところもまた深めていって頂けたら生徒さん達の自信につながっていくのではないかなという風に感じました。
- 高野教頭 今年食品化学科の方ですね、愛島小学校の3年生がきてトマトの定植をやったりとか、あとは農業科の方では成田小学校と、食品化学科の方で食育事業ということで牛をつれて見て触ったりとかっていう様なこともやりますし、あと今度野菜部門の方で柳生小学校の特別支援学級との連携というようなことも、そういったお話とかも頂きながら、高校生が年代の若い子供達との交流といいますか生徒が指導するといったものにも取り組むようになってきております。
- 川口教諭 すみません、あと芋掘りもですね、去年は3600人くらいだったんですけども園児が来ています。芋掘りをするのに園児が、ただ掘れないので、生徒がシャベルで軽くあげておだけなんですけども、ただあんまりやりすぎると芋拾いになっちゃうから芋掘りになるように工夫をしながら、そういう

こともやっております。

大泉会長 いろいろ学内資源がいっぱいあるから。

平本委員 そうだね、資源が、ものがあるってことは強いですよ。

川口教諭 すみません、あとコスト面で話があったんですけども、広浦の時は4、5千万円を農産物で販売していました。こちらにきてからは1800万くらいあげております。

大泉会長 4、5千万か。イチゴからだったら十分だね。それでそうした農業教育に限らず産業教育に関して24回全国産業教育フェアていうのがあるという話なのでちょっとその話を。

山内課長 これですね、この後と思ったのですがちょっと予定の時間になっております。もしよろしければこのまま予定通りスライド上映を。もしそうでなければ来月第2回のこういった催しを考えておりますのでその際にさせて頂ければその機会にとも思ったんですが。来月6月のこの移動審議会の時でよろしければその時に。もしくはもしみなさんのお時間が許すのであればこの後続けさせて頂きますが。

大泉会長 僕はいいけど一応4時に終わるっていったんだから来月にしようか。

西村委員 一つだけちょっとご紹介をかねて。4時過ぎてしまいましたけど。実は先ほどの卒業後の主な進路で就職、いろいろと頑張ってもらっちゃるというお話伺ったんですけどもうちの方の雇用対策課という課で昨年度新規高卒者の職場定着に関する調査というのを行ったんですよ。それで、就職した後3年以内にやめてしまうという宮城県の高校生の実態をですね、これが全国平均を下回ってるというか上回ってるんですよ。要するに辞めちゃう子が全国平均より多いとそういう状況で問題意識を持ちましてですね。1700社ほどの企業に調査をかけてあと卒業生22年度から24年度の3カ年の卒業生1500人ほどアンケートをとりました。その結果ですね、当然前からこんなことだろうなということの裏付けになったんですけど、例えば従業員が少ないほど離職率が高いとか、あるいは飲食宿泊業その他サービス業は非常に高く、製造業は低いというようなこと。それでどうしてやめてしまうのかと

いうと、人間関係に悩んだと。思いとどまった理由として相談相手に説得されたというのがあるんですね。それからちょっと何が言いたいかというのですね、高校を卒業した後その3年以内の子供達へのフォローというのはどういう風にやってらっしゃるのかなということと、生徒的には何も卒業生だからないんでしょうけどそのやっぱり3年間で大事かなという風に思っております、そんな調査を県のホームページに掲載しておりますのでぜひ先生方もご覧頂いてですね、何かこんなことしたらいいんじゃないかとそんなお話ありましたらぜひ私の先ほどの名刺のメールアドレスに送って頂いても結構ですし、担当課の雇用対策課の方にお申し出頂ければという風に思っております。そんなことで高校教育課さんにもそういう担当課の方からご連絡いってると思いますが、なんとか高校生達が就職された後もフォローして長くお勤め頂ければなという風に思いました。すみませんお時間とらせて頂きました。

大泉会長 大学もそうなんだよね。3年以内にやめるっていうのはね。だから職業が流動化するのがいいことか悪いことかってこともあるんでしょうけど特に食品化学科、生活でしたっけ？流通業の職業関係多いですよ。それと離職率が高くなるって話がデータが出るようなので、その辺の考え方も生徒に少し含めながら教育して頂くとありがたいって話ですかね。

山内課長 はい。実はこの産業教育を担当しているキャリア教育班というのは仕事が3つありましてね。一つはこの産業教育、それからあともう一つはキャリア教育、そして3つめがいわゆる雇用対策と申しますか、就職指導をしてるところなんです。ですから私どももその離職率とか定着率のデータなど持っております。さらにもう少し言えば産業教育の子供達が産業教育の高校を卒業した後に、例えば農業高校を卒業してどれくらい農業してるのかとか、そういったデータもあるわけなんですね。ですからこの産業教育審議会の場でもですね、情報提供というかデータとして今後そういったものも少しずつお出ししながら、いろいろご検討させて頂ければなという風には思っております。

大泉会長 そうだね。一応お約束の時間になりましたが、よろしゅうございますか？じゃ、司会をお願いします。

進行 では議長の大泉会長ありがとうございました。それでは事務局からご連絡を申し上げます。

佐々木課長 事務局からご連絡をさせていただきます。本日の審議会の中でご意見話しきれなかった部分があったかと思しますので、それにつきましては、このFAX用紙があったかと思えます。こちらにご記入頂きまして6月の18日までに頂戴できればと思っております。大変お忙しい中にご迷惑おかけいたしますがどうぞよろしく願いいたします。私からは以上です。

進行 本日は熱心なご審議ありがとうございました。それでは閉会の挨拶を高校教育課長山内明樹が申し上げます。

山内課長 本日は大変お疲れ様でございました。県庁を離れての移動審議会というのは産教審ではこれまであまりやってきていなかったんですけども、これからはこういう機会をできればたくさん増やしていきたいという風に思っています。ねらいとしては2つありまして、今後の審議会の参考にして頂くということが1つ。それからこれまで提言とか答申たくさん頂いてるんですがその検証をしなきゃいけないんですね。そういったこれから現場の検証をしていく上での参考にして頂く。そういったところで考えたところがございます。学校だけでなくいろんな職業訓練機関とか、あるいは場合によっては民間の事業所さんとか、そういったところを訪問してですね、さらにもう少し付け加えれば生徒諸君とかあるいは職員の方々と意見交換するとか、そういったことも取り入れながらこういった機会をどんどん増やしていければなあという風に思っております。今回そういったところで第1回目を宮城農業高校で実施させていただきました。第2回なんですけど、実は1年と3ヶ月ぶりに実はこの審議会やったというのをご存じだったでしょうか。昨年1年間は実は開催しませんでした。ちょっと事務局の怠慢もあったわけなんですけど、今回は来月6月にさっそく行いたいと思っております。来月は同じく宮城農業さんと同じようにこの震災で大変な被害を受けました宮城水産高校、こちらを会場に6月に開催いたします。水産高校はこの春学科改編をやりまして、調理師養成科というのを作りました。家政系の調理師養成課程というのは全国にいくつかあるんですけど、水産高校に調理師養成課程作ったということで大変珍しい取り組みをはじめました。あらたな水産教育の創造にむけて動き出したという学校なんですね。委員の皆様にはその取り組み状況について視察をして頂いて今後の水産教育のあり方についていろいろご助言を頂ければという風に思っております。次回よろしく願いしたいと思っております。それでは結びになりますが、会場をご提供頂きました農業高校の職員の方々と

生徒諸君に改めて感謝を申し上げて閉会のあいさつにさせていただきます。
本日は大変ありがとうございました。

進行 閉会の前に情報提供ということで宮城農業高校の浅野教頭先生お願いします。

浅野教頭 今日はありがとうございました。今日の午前中、海岸林の再生の植樹活動ということで本校の生徒が活動して参りました。その活動の様子が本日の夕方のNHKのてれまさむねと、あとは東北放送のNスタ宮城で放映されると連絡が入っております。もしお時間があればぜひその活動もご覧頂ければと思います。よろしくお願いいたします。

進行 以上をもちまして、平成26年度宮城県産業教育審議会を閉じさせていただきます。本日はありがとうございました。